

## 年間第16主日

福音朗読 ルカ 10・38-42

2022.7.17

カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

広島教区の白濱司教様は、司教様になる前は神学校の先生でした。ちょっと季節外れですけど、クリスマスを準備する待降節の黙想の時に、白濱司教様は五島列島のご出身ですが、故郷のご自分の教会での出来事を話し合ってくれました。クリスマスと言えば、馬小屋。祠みたいな中にクリスマスの情景を思い起こすために、その時のご像を置きますね。で、ある時に、シスターが、「馬小屋の中に待降節の間、イエス様をお迎えするという心を表わすために教会の人が藁を一本ずつ持ち寄って、イエス様が寒くないように馬小屋の中に藁を敷きましょう」って、いいアイデアを出して、でも、教会の人は一所懸命だから、みんな言われた通り藁をいっぱい持って来たら、藁がいっぱいになっちゃって、馬小屋が埋まっちゃってご像が入らなくなっていました、みたいな、そういうようなことを話してくれたんです。だから、一所懸命やるのは大切なんですけども、それが何のためか、と。

今日、イエス様は「必要なことはただ一つ」っておっしゃいました。それは何か一種類の仕事っていう意味じゃないですね。主と共にある、どんなときにも、ということなんです。わたしたちは、とにかく、何かを、活動でも祈りでも、祈りできえもだと思えますよ、一所懸命してると、自分というものがだんだん大きくなって、イエス様がいらっしゃるスペースが心の中になくなってしまっていることがあるんじゃないかなあ、ということを経験したマルタの体験は語っているような気がします。

マルタが「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた」って書いてあります。この「もてなし」って訳されているのは、もともとの古代ギリシア語では「ディアコニア」っていう単語なんです。その「ディアコニア」から出来た言葉は「ディアコノス」、英語で言えば「ディーコン (deacon)」。日本語で言えば、司祭の一年前になる助祭。それは「ディアコニア」から来ている。つまり「奉仕職」っていう意味なんです。だから、この物語を書いたルカの福音

書の著者は、物語の流れから言えばイエス様がおうちにいらっしゃって、いろんなもてなし、だからご飯の準備をしたり、足を洗ったり、泊まる場所を準備したりっていうもてなしっていうふうに訳していいんだけど、このお話を伝えている聖書を書いた人の心は、ディアコニア、教会共同体が行っている色々、貧しい人に対する奉仕だったり、あるいは、いろんなメンバーがふさわしくみ言葉を聞けるようにだったりというような、教会での奉仕職を念頭に置きながらこの物語をわたしたちに伝えている、ということは十分考えられるんです。わざわざその単語を使っているんだから。いろんなディアコニアのために忙しく立ち働いていました、と。「家事」とかを表わす単語じゃないのを使っているんですから。

つまり、そういういろんな奉仕でさえも、一所懸命やってるうちにだんだん「自分がやってるのに、あの人やらない」というような、どんな奉仕であってもイエス様と共にいて、そしてイエス様から力をいただくっていうものだったはずなのに、不満の種、思い煩いの種になっていっちゃう。でも、マルタが偉いのは、その不満を直接イエス様に申し上げたということですね。それは、例えば「あの人やらない」と、気の強い人だったら直接マリアの所に行って「あんた、なに座ってんの。やりなさい」って直接言うとか、あるいは自分の中で「まったく自分だけが」って、自分の中で自分に向かって愚痴を言うとか、あるいは他の誰かに「うちの妹はこうでこうで、、」って悪口を言うとかいうことで解決しようとするんですけど、この物語の中で、イエス様に直接申し上げる。それならば、イエス様からまた答えが返ってくる。これは祈りですね、わたしたちの時代で言うならば。わたしたちは直接イエス様と、人間と人間が語り合うようにすぐにイエス様の所に行ってお話することはできませんけども、でもそれはイエス様との対話、祈りの中で、神様からの、イエス様からの答えを待つ。そうすると、自分の姿がもう一回見えてくる。いろんなことに心を乱して思い悩んでるなあ、って。マルタがその後どうしたかは、聖書の物語の中には書かれていません。それは、どうしたか読者に考えさせる、あるいは、あなたたちだったらどうしますかって問いかけられている、そんなことなんじゃないかなという気がします。

わたしたちが一所懸命いろんなことをやる時にイエス様と共にいるってことを、大切なことをひとつ忘れちゃうと同時に、イエス様と共にいるってことをいつも思い出しているならば、どんなことでもディアコニア、奉仕になるんだ

ということが、逆にまた言えると思います。一般的に仕事と思われていないことであっても、です。

これはまた別のある修道院のシスター、もう亡くなりましたけど、そのシスターのことを伺ったときに、修道院にシスターたちが何人か一緒に住んで、それぞれの働きがあります。でも、高齢のシスターはご病気で、修道院の中で療養したり、通院したり、ときどき入院したりされる。そのシスターは、この修道院の中で「わたしは病気の係だから、他の皆さんは外で一所懸命働きなさい」って最後言ってたってことです。病気って、信仰じゃない目から見れば働きでも何でもないように見えるけど、でもイエス様と共に今のその時を過ごす、その思いでもう一回受け取り直すならば、病気療養もディアコニアになる。ディアコニア、奉仕ですね。神様のためにいろんな形で働く、そしてイエスと共にいる、そしてますますイエスと仲良くなっていく、また他の人もイエスに導く、そういういろんな意味を含む奉仕になっていく、ということそのシスターに教えていただいたような感じがします。

だから、わたしたちは一所懸命にやっているときこそ、イエス様のスペースが、「わたしのスペースはどこにありますか」っていう問いかけが、「心の中に場所がありますか」って言われている声に耳を傾けるとともに、逆にどんな時でもイエスと共にあるならば、そこに実りはイエス様自身がもたらしてくださるんだということに信頼を置いて、日々の信仰生活がイエスともっともっと仲良くなり、そしてイエスを通して他の人とのつながりを恵みとして受け取り合う、そういうものとしてあるんだ、信仰が、ということをいつも、忘れちゃうんだけど思い出させていただきながら、それぞれ信者として歩んで行けたらいいなあと思います。いつも共にいてくださる、わたしたちが忘れる時でも、いつも呼び掛けてくださるイエスのことを思い起こしながら、このごミサをお互いのためにお捧げしたいと思います。